

【福島大学むらの大学アーカイブ 32】 【飯舘Chapter 4】
やっぱり最後は“人” 働いて、繋がって
いいたて結い農園代表理事 長正増夫さん



インタビュー日時：2024年10月19日、11月24日
インタビュー場所：大久保集会所、長正さん宅
聞き手：畠山公、安倍さくら、菅野彪真、久保田彩乃

プロフィール

1947年2月16日生まれ

飯舘出身。いいたて結い農園代表理事。避難指示解除後、営農再開を目指し「いいたて結い農園」を立ち上げ、えごまやそばなどの無農薬栽培に取り組んでいる。

—まず、自己紹介をお願いします。

長正：生年月日は、パッと言えねえ年だな。1947年2月16日生まれ、77歳。生まれも育ちも飯舘村で、今は家内と暮らしています。いいたて結い農園代表の代表理事です。

—ご経歴などを教えてください。小学校は、飯樋小学校になるんですか。

長正：うん。小学校も中学校も高校も地元。小学校は、飯樋小学校。当時は、飯舘村第一小学校って名前だったね。飯舘村に合併する前は飯舘村っていうのがあって、その、第一小学校。中学校は飯舘村立飯樋中学校。高校は、飯舘村に県立相馬農業高校飯舘分校があって、そこに進学しました。高校卒業後に役場に就職しました。仕事をしながら東京の富士短期大学(経済学科)で二年間通信教育を受けて勉強をしました。

役場職員になったのは昭和41年の4月から。職員から副村長となり平成21年12月に辞めました。

—ということは、平成までお勤めされていたんですか。

長正：副村長は1期で辞めさせてもらいました。ですから役場職員から副村長まで勤めました。震災前の職員時代は主に村おこし運動に関わってきたので、辞めなくてもよかったんだけど。そろそろ自分なりの人生として、ソバ屋でもやりたい気持ちがあって、役場を辞めさせてもらった。それで悠々自適にやろうかなと思っていたら、2、3年後に震災と原発事故が起きちゃった。という状況だな。いま振り返ると、あのとき役場を辞めねえでいたら、震災起きた後だったら、もう辞められなかったな(笑) 逃げるようになっちゃうから。

また私は兼業農家で趣味でソバを作ってた。ソバにのめりこんじゃってな。結局美味しいソバっていうのはなんなんだから追求していくと、大切なのはソバそのものの素材。ソバを自分で栽培して自分で乾燥させ、自分で石臼で粉を挽いて。そうしないと、納得できるようなソバは、なかなかできないんだ。そうは言っても、簡単にはいかない。もっといいソバをつくるには、もっと栽培方法を変えたり、乾燥や製粉をこうすればいいんじゃないか。そういうのに取りつかれちゃったから、奥の深いソバの虜になっていました。

あとは蜜蜂飼ってました。野生の日本蜜蜂です。今市販されている蜂蜜ほとんどが西洋蜜蜂の蜂蜜だもんな。確かに経済性や営業としてやるには西洋蜜蜂がいいんだけど。日本蜜蜂っていうのは、蜂蜜の量は少ないんだけどね。蜂蜜を分析するとはるかに西洋蜂蜜より質がいい。日本蜜蜂は日本人に似てるんだな。体は小さいけどいいものを作る。そう日本蜜蜂を絶やしてはならないなあと思ってる。世界的にも農薬のせいで蜜蜂全体がものすごく減ってるからね。農薬とかは、やっぱり昆虫なんかにてきめんでどどんやられちゃう。

そんななかで野生の日本蜜蜂がこの地域で活動してるっていうことは、この地域環境が人間も安心して生活できる地域環境だなということが、科学的な根拠がなくても分かるような気がするね。生物が生き生きとしてればね。そういうことで、日本蜜蜂に関わって今もやっています。震災前は、巣箱10箱分ぐらい飼っていたけどね。6年間も避難しているうちに、手入れができないから、みんな逃げられちゃった。彼らの世界にもオオスズメバチとかのいろんな天敵がいるわけで、そいつらにやられちゃって。でも今は2箱飼っている。去年から自然に巣箱に入っている。日本蜜蜂はなかなか難しいんだ。いい巣箱作ったって必ずしも入るわけじゃない。気に食わなければ、すぐ出ていくしね。

日本蜜蜂が喜んで入ってくれるような箱を作ったり、手入れをしたり。大変だけどそういうのが面白く楽しいと思ってる。

1. 飯舘村の震災

★震災当日

—震災当日は、どこで何をされていたか、覚えていらっしゃるでしょうか。

長正：うちの子ども家族がそれぞれ福島市と伊達市に住んでいて、震災の日は伊達市に行く途中だった。車で役場のあたりまで行ったら、もうすごい。「なんだこれは、地球が壊れるんじ

やないか」そういう揺れの状況でしたね。

—これまで生きてこられて、あれほど大きな地震のご経験はありましたか。

長正：いや、ない。もちろんない。だから何が起こってるか分からなかったな。飯館村は、地震は本当に大変だったけど、被害っていう大きな被害はなかったな。俺の家も屋根瓦がちょっと崩れたくらいで、建物が崩壊したとか、道路が決壊したなんていうのはなかった。ただ最大の問題は、その3日後に原発が爆発したということだな。飯館村に住んでは駄目だっていう話になっちゃって。

—原発事故の爆発のニュースは、テレビでご覧になったんですか。

長正：震災の日は、停電でテレビも何もつかなかったから車のラジオを聞いたのね。ただ当時は津波のニュースが主流で、原発なんていうのは誰も心配してなかったな。そういう状態で、南相馬市だとかの沿岸部の人たちは、津波が恐ろしいからって、みんな飯館村に逃げてきたんだよ。そして、飯館村の体育館とかで2日ぐらい過ごしていたんだけど、そのうち、今度は原発のニュースが入って来たわけだな。

原発のモニタリング調査の装置が役場にあったんだけど、そのときで、3.ナンボだか、4近くの数値が出てたんだよな。その当時、われわれは原発の知識なんていうのは何もなかったから、「放射線だって？シーベルトなんていうのはなんだ？ブイベルトの間違えじゃないか？」くらいの話しかなかったんだ。けども、数字的に、ちょっと飯館村が怪しいって状況になってきて、だんだん国のほうからも、この数字はちょっと…飯館村も避難対象だなということになったわけだな。ただ、飯館村の場合はそういう事情があって、避難するタイミングが他の地域よりも遅かったんだよな。南相馬とか富岡とか双葉地方…つまり浜の人たちは、原発の状況が、目で見て分かるわけだよな。そして、何か爆発した！と、みんなでワーツと逃げたわけだよな。大変だったんだと思うな…。もうなりふり構わず、みんな軽トラックとかも使って、浜の人たちはみんな中通りに避難したわけだな。で、われわれ飯館村は、「まさか飯館村は、そこまですつことねえべ」って言ってたんだけど、2日3日と過ぎると、やっぱり、線量が高いと役場の職員が言ってきた。俺役場に電話して、「何語ってんだ、そんなの故障してんだべ、蹴っ飛ばせ」って言ったんだけど、間違いねえんだと。あの当時、南相馬より高いんだよな。「浜のほうより高いんだ」って思ってたけども、あとで気流の関係だとわかった。

そんなことで、いろいろあったけども、飯館村が避難決定したのは、4月の末だったと思うな。発災からもう1カ月以上も過ぎてからだった。それまではずっと飯館にいたよ。何か症状が出たわけでもないし、腹痛くなったりしたわけでもないし。ただ避難指示が出てしまったから、避難せざるを得なくなった。飯館村の人の多くは、「避難なんて言ったって、まあせいぜい半年もいれば帰ってこられっべ」っていう考えでいたわけだよな。だから、俺は、中通りよりもっと向こうの、猪苗代っていうところですね。磐梯山の猪苗代に避難した。猪苗代っていうのは、会津若松よりはちょっと手前なんだけど、標高が高くて、気候なんか飯館村と似ているところ。

あとは、磐梯山があって、猪苗代湖があって、うしろには裏磐梯ね、すごい観光地もあるし、風光明媚（めいび）なところですよ。だから、「そこに行って、半年ぐらい遊んでくっぺ」と、そんな軽い気持ちで猪苗代に避難した。

猪苗代のアパートに避難することになったんだけど、その当時、私には90歳を超えた親2人がいたんだ。でも、90を超えた両親にとってはアパート暮らしは難しいなと思ったから、何とかお願いして、近くの野地温泉っていうところにうちの両親を入れてもらって、私ら夫婦2人は猪苗代のアパートを借りた。

実際、私が避難したのは6月からです。避難しろって言われたのは4月だったけども、そんなに緊急っていてもねえ、命取られるわけでねえんだから（笑）。

大体飯館村の人達はそんな風で、結構のんびりしてたんですね。けどその分、避難場所を探すことには苦労したの。というのは、双葉地方とかの浜の人たちはみんな、早い段階でワーツと避難して、いい場所を確保しちゃってるわけ。

当時、猪苗代あたりの温泉地のコテージだとかを借りて、多少くらい遊んでくるかなーという、軽い気持ちでいたんだけど、そういう素敵なところはみんな、先に避難していた人たちが

借りてて。だから何とか猪苗代の不動産屋に頼んで、アパートを貸してもらった。

2. 避難生活

—そのアパートで6年間過ごされたんですか。

長正：いや、猪苗代には6年間ずっとはいない。6月、7月、8月の3カ月間いたんだけど、アパートのおかみさんに、「飯館も寒いって言うけど、猪苗代の冬は半端じゃねえからね」って言われてね。確かに、以前冬の猪苗代に行ったとき、車なんかはもう10メートル先が見えないくらい地吹雪が毎日のようにあったんだ。確かに半端じゃなかったんだよ。これはちょっと困ったなと思って。

あとは、孫たちの、部活だの塾だの送迎なんかもしなくちゃならなかったから、伊達市あたりが、気候的にも送迎するにもちょうどいいということで、そこに一戸建て二つの住宅を借りて、私ら夫婦と、お年寄りの親夫婦と、一戸建てを二つ借りて、9月からは伊達市の保原町に来た。そこで、避難解除になるまでの6年間いたわけだね。

—避難生活6年間というのは、どんな生活でしたか。

長正：やっぱり避難生活6年ってというのは、長すぎたなあとと思うね。それはどういうことかっていうと、例えば小さい子どもだったら、小学1年生は中学生になってるよな。

そういう小さい子を教育をしなきゃならないような若い世代ってというのは、はい、飯館村、避難指示が解除になりましたなんて言ったって、帰ってこられないと思う。そりゃ、子どもの教育を考えたらね。これが2、3年だったら、また話は別なんだけど。6年間ってというのは、そういう意味で、生活の様式を一変させちゃったからね。

だから、特に今、飯館村の場合、若い世代、若い人たちが帰ってこないっていうのには、そういう事情があるわけだな。

放射線は、もう心配ないといっても、6年間もあるとね…んだべ？小学1年生が中学生になって、また飯館村に来て、新しい友達を作るだとか何とか、そんなことができるわけがない。6年間ってというのは長い、子どもだって大人だって、その地域で根っこを張ってしまうわけだからな。

—6年もあればその地域での生活は安定しますよね。

長正：あとは、勿論避難生活などは大変だったとは思っただけでも、避難者の本音は「この原発補償によって経済的には助かった」っていう人が大半だと思っている。とはいえ金銭的に豊かになったから幸せになるかっていうと、これはまた難しい問題が生じている。

具体的に言うと、「家族」や「夫婦」が壊れている例が少なくはない。人間はお金がなければ助け合うけど、不労所得は人間関係を破壊する可能性も高まる。以前の飯館村は暮らしが容易ではなかったが、親たちは朝早くから夕方遅くまで働いた。親たちの後姿をみて、子供たちが健全に成長していった。そうしたことを考えると、子供たちの成長にも決して好ましい状況ではないと思う。

今回の原発補償は、勤勉性や助け合う相互扶助の精神を希薄化させ、人間性が劣化してしまうことをとても心配している。

3. 自分たちで放射線量を測る

—避難先で生活されている間は、飯館に来られたりしていませんか。

長正：よく来てました。だって、来たって、空気吸ったからって、頭悪くなるわけでも無いし(笑)。

でも、一番心配だったのは、放射線量がどのくらいあって、われわれの健康に具体的にどう

いう被害があるのかということ。こういうのは、自分たちでキチッと科学的に確認する必要があると思った。もうこんな状況になった以上は逃げられないんだから。

そこに、土壌の放射線量を測ってる写真があるでしょう。あの当時、放射線量を自分たちで調べようとしたんだけど、調べるっていっても、機械も知識もない。どうしたらいいべと。あの当時は、ガイガーカウンターなんていうのは、そのへんでどこでも売ってた。でもそんなのじゃ、とてもじゃないが役に立たないわけだよな。

だから福島大学に行って、「私ら、こういうことで、自分たちで放射線量を科学的に把握したいんだけど、何とか協力できませんか」って。そうしたら福島大学でも、喜んで協力させてもらいますよと言ってもらえた。それで、ああいう調査をやったわけ。土壌調査の機械なんていうのは、600万円くらいするんだ。

あとは、空間線量も測ったね。除染作業をする前と、除染中、除染後に1回ずつ、合計3回やったね。

大学の先生を含めたいろんな人に協力してもらった。あの当時、大学の先生だけでも、新潟大の毘沙門天（びしゃもんてん）クラブとかから15、6人来たんですよ。もちろん放射線に詳しい先生はいたし、あとはお医者さん、土壌関係の専門家の先生もいらした。そんな人たちがわれわれをサポートしてくれたんです。

こっちの、あの縦の、一番上の写真で中心になっている、あの人が、新潟大から来て、いろいろ支援してくれた、野中先生（野中昌法：新潟大学大学院教授）という。

彼は福島に移住して、本当は食農学類、たぶん俺は食農学類の一番偉いところにつく人ではなかったかなと思ってただけど、間もなくがんで亡くなっちゃったのよ。

福島にも、隣の東和町というところに空き家を買ってね。私も本当に、期待はしていました。土壌学の専門でしたね。

そんなことで、一番心配な、この放射線が、われわれが本当に日常生活をしていく上で、どのくらい影響があるのかというのを、それで知ることができました。

3回やったけども、まあこまかい数字はともかく、結論的には、そう深刻な問題は起きないと。

問題は、全てでなくて、場所、場所によって、やっぱり高いところがあんのよな、拠点的に。うちのまわりだと、例えば雨水がたまるような、あそこはものすごく高い。問題は、そういうところに行かなければいいと。

そういうことで、だからそういう高いところもみんな、自分のうちでどこが高いのかっていうのを、大体把握できたわけだよな。

そんなことでね、結論的には、まあそう深刻な問題は起きないと、放射線に関してはね。

私はそういうこともあって、解除と同時に、すぐ帰って来ました。

—自分たちで調査を始めたというのは、どのような理由からでしょうか？

長正：あの当時の放射線量についての情報は、専門家でもまちまちだったのね。極端な話をすると、「飯館村は、もう人が住めねえんでねえか」って言う人もいれば、「いや、飯館村は、これから玉川温泉と同じだ」「適度な放射線量で、健康ランドみたいなもんだ」っていう人もいるわけ。そんなだから、われわれはどこを信じたらいいか分かんねえ。行政だって、そんなところまで、神経が行かない。役場も県も。

それで、それなりの信頼のおける人たちに支援を得て、自分たちで放射線をキチッと把握したほうがいいと思った。それで福島大学の門をたたいた。そういうことです。

あの当時、北海道大学から来た、小松知未先生（現：北海道大学北方生物圏フィールド科学センター准教授）、それと石井秀樹先生（現：福島大学食農学類准教授）、この二人が中心になって、福島大学の先生方に連絡してもらって、さらに新潟大学の先生方にも協力をいただきました。

私が一番最初に、小松先生といろいろ打ち合わせしてるうちに、私は小松先生がまだ30手前だから、「これから結婚すんだべ、あんたは。これから子ども産むんだべ。ほんじゃ飯館村には来らんねえから」って言ったらね、そしたら、「長正さん、全然心配ないです」。それでマスクもかけないで、線量機持って歩いて調査をしていました。ああ、正しく知ればそういうことかって。

あともう一つは、私の甥が日本航空の機長をやっているんだけど、あの当時連日のように飯

館村の線量なんかテレビなんかで報道されているのを見て、電話をもらった、「増夫おじちゃん、飯舘村の線量で避難してたんでは、私らは仕事になんないですよ」と。ああ、そういうことなのか。

まあ、そんなこともあって、さっき言ったように、自分たちで福島大学の先生方にもお世話になって、ある程度科学的にも確認できて、まあ危ないところもキチッと分かった。そういうことで、まあそんなに深刻に考える必要はないなと思ってます。

4. 村に戻る

一村に戻られてからというのは、震災前の生活と何か変わったことってというのは、長正さんご自身としてはありましたか。

長正；まず、変わったっていうか、もう土台から変わってるわけだな。まず帰って来る人が少ない。しかも若い人は来ない。さっき言った理由でね。やっぱり若い人は来られないわな。

実際、ここに帰って来た人の顔ぶれを見たら、高齢者ばかりよ。私らも含めてだけでもね。いや、私の地域ばかりだけでも、村全体でもそうなんだな。

ただ、一部には若い人も帰って来てる人もいるかもしれないけど、私のこの12区の地区では、ほとんど高齢者ばかり。

高齢者ばかりで、さて、これから何をしてね。だけでもこれ、長年、われわれの先祖がこういうふうに切り開いた農地っていうのを、やっぱり荒らすわけにはいかないべと。やっぱり何か作って。

あとは、自分の住んでる地域だから、やっぱり環境的にも、農地を管理するということはいいことだし。じゃあ、しからば、それじゃあ牛飼ったり、大型機械で田んぼをっていったって、これまた無理な話だな、高齢者になってだね。

いろいろ考えた末、雑穀、今、エゴマやってますけども、そういう雑穀っていうのは、割合軽労働だから。そういうところで、高齢者でも、従来のように農作業ができるような、ということで、今、エゴマとか、ソバとか。

あとはそのやり方も、それぞれやるんでなくて、共同でやると。地域コミュニティというのが、何しろないわけだから、もう。今まではあったけども、それぞれ、分散しちゃって、そこで人のつながりっていうのは、非常になくなったわけだな。

だから、あえてやっぱり農作業を、共同作業でやると。作業日を決めてね。毎日ではないけども、週2日とか3日を決めて、みんなで集まって、共同作業をすると。それがやっぱり、地域コミュニティの中では非常に大事だなと。そういうことから、エゴマなんかを始めてきて。今、結い農園というのは法人化してますけども、別に法人化する必要もなかったんだけど、油を搾ったり加工して売るとなると、保健所の許可が必要になってくる、具体的にはね、食品衛生法上の許可。個人でやるか、法人でやるかということになっちゃうわけだね。

そういう事情もあって、結い農園という法人化をした。こういうことですね。

5. 除染に対して

一先ほどの放射線量の話がありましたが、飯舘村は、わりと山の恵みをすごく大事にされてきたと聞いています。森林の除染ができないということが、生活の変化や苦勞を与えたことについてはどのようにお考えですか。

長正：除染をすることに、震災当時、避難しているときは、私は、何かいい方法はねえのかと思っていました。

これだけ今人類は、お月さまだって火星にだって行けるような技術を持ってるわけだから、あんな、ブルドーザーで土をはがすような、そんな原始的な方法でなくて、例えば放射線をバーツと集めるぐらいの、磁石みたいな、何かね、世界の科学の英知を集めたら、そういうことはできないのかと。

ましてや、農地を除染するというのは、結局、重機で全部、表土何センチ、はがすわけだよな。そうすると、農業をやるには、それはもう、ある意味では致命傷なんだよな。

だって、耕土っていうのは何年もかけて、そこにいろんな微生物があったりなったりして、それで、ものが採れるわけだからね。その耕土をはがすわけだ、それ。

そうすると、これはもう、農業をやる人にとっては、致命傷の話なんだよな、もう一回土作りっていうのは。農業は、なんだかんだ言っても、土作りだからね。

そんなこともあって、いわゆるゼネコンがやるような表土をはぎ取る除染作業には、個人的に反対でした。何かもっと、世界の科学の英知を集めて、さっき言った話ではないけども、もっと簡単で有効な方法があるのではねえのか。

その当時ね、いろんな人が私のところに来ました。北海道の人だけでもね、鉱石なんだけども、鉱石の灰ね。北海道の、ちょっと函館から行ったところに、小さな町なんだけども、その鉱石っていうのは、何か特殊なんだな。何か分かんないけども、科学的には。

いずれにしてもそこで採れる鉱石っていうのは、これを散布すれば、必ず放射線が消えるはずだ、と彼は自信を持って言うんですよ。

それは何だかっていうと、今までいろんな実験をやって、例えば北海道なんかで競走馬を育成すると。競走馬の餌にこれを混ぜたら、バツグンの成長もしたと。そういうのに顕著に表れている。だから放射線だって絶対消えるはずだって。

私は、いや、だけでも俺はお金ねえんだし、そんなの協力できない。いや、私一人でやりますと。自分で北海道からね、大型トラックで、その鉱石を積んできて、重機で、バーッと。

じゃあ俺の畑貸すから、金は出されんけど、そういう協力はするからと。自分でまいて、それを2年くらいやったんですよ。もうすごいと思ったな。

—何か変化はありましたか。

ありました。確かに効いてるとおもった。ゼロにはならねえんだけど、線量が下がってる。だけど、環境省では、それは認めない。

あとはまだまだあった。水を使って、何かそれも特殊な水（笑）。これだって散布して、データを見ると確かに下がるんだよな。だけでも、さっき言ったように、環境庁では認めん。

何ていうんだ、おらは分かんねえけども、難しい放射線の方程式みたいなのがあっぺしたな。そうした学術的にキチッと証明できないと駄目だって。

例えば、それが確かだって、それを学会なり何なりで承認するには、とても1年、2年の話ではない。ただ、現実には線量は下がっていたのは事実でした。

私ばかりでなく、村内ではそういう人たちに協力して、田んぼを貸したりもあったりして。水稻を作ったりもして、確かに線量は下がっていました。

それから福島県の棚倉町にも、それに似たような鉱石があって、それを使って放射線量が下がって。それは総務省の特許を取ったと聞いた。それでも環境庁では認めねえんだ。そういうこともあったけども、結論的には環境庁の方針どおり、原始的な表土はぎ取り除染をすすめることに変わりはない。そんなことで俺一人反対して、まわりは全員やって、俺がもの作ったって、あの野郎のところやらないから放射線残ってるなんて言われるから、じゃあやらざるを得ない状況でした。

隣の町の、東和町。あそこもそんなに変わりなかったの。有機農業をやってる方から電話をいただきました。「長正さん、そんな耕土はがしたら、あと農業できなくなっぺした」。そのとおりのんだよ。「私らはそんなことやんねえよ」。

確かに東和町は除染事業やんなかったね。いま考えて見ると、確かに飯館村の線量は下がりました。だけどそれが除染事業の効果だったのかっては、私は言い切れねえと思う。時間経過や雨風で流され自然に下がったのが大部分だと思う。

まあ、今回の原発の除染作業は、私個人としては莫大な税金使ったわりには、効果はなかったんでねえかなと考えています。

6. 原発に対して

—震災前、飯館村の方々は、原発のことを考えたり、意識することはありましたか。

長正：古い話だけでも、私ら若いころは労働運動が活発でした。役場の職員だって職員労働組合っていうのがあって、毎年春になると春闘って言葉があった。春にね、労働者が賃上げ要求をした。日本の労働関係者がみんな一斉にストライキを行ったり…今はほとんど、そんなことはやらないわな。

東京電力で原子力発電所を作る際、福島県の状況のなかでも特に双葉地方は、過疎地で大変な地域、あそこに原発を作れば、みんな潤うだろうと。福島県も東京電力は双葉地方に作りたいたいということで進められていた。

その当時、私ら労働組合のなかでは「原発反対」の運動をした。

—役場にお勤めの頃ですか？

長正：うん、役場に入ってたころだ。原発反対だってね。もう原発反対のビラ配りを、双葉地方の町村でもやって、もちろん飯館村や相馬地方ばかりでない、いわきからも、福島からも、県内の労働組合関係者が、一丸となって反対運動やった経過があります。

—反対の理由は。

長正：原発事故が心配だから。絶対安心はありえないと。反対運動しても、結局原発建設は止められなかった。

やっぱり双葉地方の人たちは、最終的には起きるかどうかわからない原発事故より、現実的な経済的な潤いを多くの人たちは選んだわけ。

確かに原発交付金によって双葉地方は以前よりは潤ったと思う。双葉地方の役場庁舎はみんな立派に建て替えられた。また私から見ると必要以上の公共施設などもつくったり、役場の職員給料や町長や議員の報酬なんかも、大きく引き上げられた。また地域の人たちも、原発建設によって就労の機会が増え、所得水準も向上したと思います。

しかし本当に双葉地域は潤ったのだろうか？ 地域の振興は図られたのだろうか？

今回の事故が起きる前まで、双葉地方の町村は、原発増設の陳情活動をしていました。それは現存の原発の交付金だけでは財源不足となり、某町などは国・県から財政が監視される状態に陥っていました。民間会社でしたら”倒産寸前”の状態です。

原発誘致で潤うはずが、倒産寸前の状態になっていました。

—原発事故が起こったときは、「やっぱり」という気持ちになったんですか。

長正：いやそういう感情はともかく、事故当時は自分の生活そして村はどうなんだべと、そっちのほうの方が先行だからね。そんな他の町村のことは言ってもらえない。

ただ、さっき言ったように、避難生活が長すぎて、あとは賠償金が多かったこともあって、働かなくなった人が増えてしまった。人間はいくらお金があったって、働かなくては駄目なんだ。勤労の精神を忘れたら、人間は駄目だと思う。

7. “豊か”とは

—豊かになること、子どもがよく育つということから、村での暮らしというのが、どういうものだったのでしょうか。

長正：豊かっては何なのかっていう大きな疑問、豊かっていうのは何なんだべ。確かにお金なくては、豊かになれないと思う。それはやっぱりそれなりにお金も必要だ。

でも避難して、私がああ飯館村が豊かだったんだなあと思ったのはね、一つは、それまでは気が付かなかつたんだけど、家が結構まばらに点在してるわけよ。適当な間隔でね。

この家の離れていうか、間隔っていうのは何なんだろうと考えると、実際避難生活でアパート生活をしたり、隣接している一戸建てで暮らしてみると、非常に住みづらいんだよな。

ああ、そういう意味で家と家の間隔っていうのがあったんだなと。これは長い先人の生活の

知恵なんだと。夫婦げんかしたときは聞こえない。だけどもいざってうときは助け合える距離。そういう間合いっていうのは、やっぱり避難生活をして、初めて分かったな。ああ家と家が適当に離れている意味。これは素晴らしいことだったんだな。

アパート生活なり、町場の生活では、もう居づらいな。例えば、サンマ焼くっていったって、においは隣にしていたんで焼けないべ？

一確かに。

長正：テレビだって大きな音がでて、うちの年寄りなんて耳が遠いからガンガンだけど、そうすると、とてもじゃないがアパートなんか、ドンドンって音すると、隣とか2階にいる人に迷惑だ。

いや、本当にあとはもう、隣の目線というのは気にかかるな、家に入りましたって。ああ、とてもじゃねえが、耐えられないと。俺は早く飯舘村に行ったほうがいい。これじゃ寿命が縮むなと思ったんだ。こんな避難生活をやって。

だから、私から言うと、そういう暮らしの空間っていうのは、豊かさの中では非常に大事ななと思うな。

もちろん、アパートなりマンションなりでずっと小さいときから、そういうところで育てれば、それは感じないんだろうがね。われわれみたく、もう、サンマ焼いたってバーベキューやったって何だって、隣を気にしないでやれるっていう環境がね、そういう空間が必要だと思うな。

あとはやっぱり、豊かさの中では、コミュニティーだよな。避難生活してると、やっぱり、隣近所の人たちはいいんだけど、さっき言ったように、いろんな意味で他人の関係だよな。

飯舘村のように農村部は地域ぐるみの関係だから。そこが根本的に違うよな。町では家と家が近かったって、隣の人とは他人の関係だ。何かそらぞらしい。本当に腹を割ってね、まあ極端な話、悩みごととか、何とか話せるような状況ではないわな。距離は近いんだけど。だから、農村部で生活していた私にとっては、違う世界という感じがした。

農村部は家と家が離れてるけど、地域皆が何でも話せる。そういうコミュニティーっていうかな、人間関係は、やっぱり豊かさの中では大事なことだと思うな。

特に私は、高齢者になってくると特に感じるんだけど、やっぱり年寄りっていうのは、人と会ったり、しゃべったりしないと、ますます老化するからね。

若いうちはいいんだよ、みんな友達がいるからね。高齢者になってくると、行動範囲っていうのが狭くなってくるから。そうすると、おのずとしゃべったり、そういう機会が少なくなってくる。

まあ大きなことを言うかもしれないけど、いま日本は少子高齢化で、どんどん子どもが少なくなると、極端な話、例えば老人1人当たり1カ月3万年金を出すことにしたら、生産人口1人1万ずつ出さなきゃならない。そういう構造だわね。3人で1人の高齢者を背負ってるような状態だ。そろばんなんて全然合わない。

大変だと思うよ、これから皆さんの世の中は。いや、本当冗談じゃなくて。われわれが若いころはよかった。今はもう逆転しちゃってるからね。世話になる人のほうが多いわけだ。1人で3人おんぶしてると同じだから、日本の人口構成っていうのは。

だから、そういうことを考えると、われわれみたいな高齢者は、なるべく自分の子どもとか孫に、負担をかけないような生き方をしなきゃならないわ。

年金増額だとか、医療費タダだなんて要求しても、それを誰が払うんだって。結局子や孫の負担になること。どこからも金は降ってこないわけだから。

だからあまり社会に迷惑をかけないような生き方をしなきゃ。そのためには何だかっていうと、やっぱり適当に働いて、健康寿命を延ばすということなんです。

そうしていかないと、医療制度だって年金制度だって成り立たないから。

一難しいですね。

長正：難しい。だから私ら高齢者としては、なるべく若い世代に負担をかけないような生き方をしなきゃ。そのためには、なるべく病院に行かないような体づくり。

あとは頭のコンピューターが狂わないように、人に会ってしゃべったりね。そういう生き方

ってというのが、今の高齢者には、私は、求められていると思うんだ。医療現場の医者だって給料が安い、看護婦も不足じゃ大変だ。そんな状況のなかで、年寄りがたくさん病院さ行って、年寄りたちのサロン化になっちゃう。そんな国なんてはもたない。

だから高齢者そのものの生き方を変えて、年寄りは年寄りで可能な生産的な活動をしないと、私は思っているんです。

—飯館村に戻ってきたときに、すぐに協力する形ができたのですか。

長正：さっき言ったように、原発で何もかも吹っ飛ばしちゃったので、何にもねえのよ。帰って来たって年寄りばかりだから。

ただ、そうは言いつつも、やっぱりいろいろ考えてみると、さっき言ったように、地域の農地を荒らすわけにはいかない。

あと、みんなで元気で暮らすためには、やっぱり集まる機会を作って、そこで人間関係を深めていくっていうかね。そういうのを作っていかないと。またそれが一番大事なあとと思ってるわけだな。

あともう一つは、地域だけでなく、例えば、皆さん、どこだってあると思う、お祭りっていうのはあるわな。これは農村だって、どこにだって、お祭りっていうのはある。お祭っちゃ、何のためにやるか。お祭りって何のためにやるんだべ。

—自然に感謝するため…とかでしょうか。

長正：結局、人と人のつながりを深める機会なんだよな。お祭りで酒を酌み交わすとか、好きな踊りを踊るとか、そうやってそこで人間関係を深めることなんだ。人間関係っていうのは、人間社会にとって、一番大事なことなんだ。

だからそのことは遠い昔の先人たちが分かっているわけよ。原始時代からそういうのを肌で分かっているわけ。火を囲んでね、みんなでやってる。だから、そういうお祭りの意義っていうのは、私はそこにあると思うね。

だから、原発事故で避難生活解除になって、以前は地域、地域で、そういうお祭りがあったんだけど、例えば盆踊りなんかもそうだけでもね。

そういうのはまずやるようにしたいということで、そういうのを有志の人たちと段取ってね、やるようにしてます。大変だけでも、まあ10人でも20人でもいいから、やれる人でやればいいんだと。そういうことが大事なわけで。

その意義っていうのは、金銭では変え難い大切なことだから。

—お祭りに集まってくれた方たちなどに、結い農園での作業を手伝わないかと声をかけたんですか。

長正：まあそういうこともあるし、結い農園ばかりじゃなくてね、ほかにも、例えば隣の地区なんかは、若い人たちで、営農法人を作ってやっているとところもあるし。要は人間関係をどう深めていくかが、復興の大きな”鍵”だと思うね。

—お互いに手伝い合うみたいな感じ。

長正：そうそう。

—それこそ「結い」ですね。

長正：古来の農耕社会は”結いの社会”で成り立ってきた。今は機械化しちゃってるから、人手がいらなくて、今農作業でも、何でもできるんだけど、昔っていうのはせいぜい農作業、まあ牛や馬を使ったりもあるけれども、例えば田植えだって、みんな人でしょ。大体基本は人でやる。

そうすると、自分のうちのだけやってたんでは、疲れるわけだよな。夫婦で2人でね、毎日。10日も田植えやってたら、疲れちゃうね。

でも、そういうことでなくて、その地域、地域でね、きょうはAさんの田植えやっから、みんなで手伝うべ。あしたはBさんのうち。そうすると、みんなでワーッとやると、不思議と疲れな

いし、能率も上がるわけ。

そういうのはみんな、理屈でなくて、分かってんだよな。それが「結い」っていうことなんだ。助け合う。その行為が「結い」っていうこと。

だからこれは、私のところばかりじゃなくて、全国の農村社会には、そういうのがあったわけだ。

そういう農作業を通して、お互い作業を交換してやる。そこに「結い」の精神、助け合う、支え合う。それはそれで、また素晴らしい考え方だし。

だからそういうのは、震災後、地域の中で帰ってくる人は少ないけども、なるべくその「結い」の精神で、地域をみんなで作っていかうという思いで、「結い」っていう名前を付けたわけ。

—実際、農作業で、皆さんと集まって、どんな雰囲気ですか。

長正：いろんな集まる機会はあるんだよ、例えばお茶飲み会だとか、いろいろなことがあるんだけど、肝心なのはいくらでも働ける世代の人たちがどう集まって、少しでも生産活動にかかわる仕組みづくりが大切だと思っている。

やっぱり働けるうちは、さっき言ったように、人間、働かないと駄目だから、働いて、うしろにああいう写真なんかもありますけども、作業が一段落したら、ああいうふうに交流会をやったりとか。それが人間関係を結び付け、ある意味では楽しい生き方にもなって、いわゆる健康寿命増進につながっていくことになるわけだし。

8. 土と農

—農作業の話が出たので。除染のために表土をはがしてしまうと、農業に影響があると思います。それに対して、農家の人たちはどうされていますか。

長正：そういう耕した耕土っていうのを作るには、やっぱり化学肥料よりは堆肥、それも自然のだな。いま村では、堆肥をどんどん使うように、無料配布してます。やっぱり土壌を、なるべくやっぱり元の耕土に戻すというね。

だから、そういうのを私らも、ここずっとやってますから、それなりに。まあ元通りにまではいかないけどもね、大体いい状況にはなってるのかなあと思いますね。

—そんな中で長正さんが、無農薬にこだわってやってらっしゃるというのは、どういった思いからでしょうか。

長正：これも大げさなことを言うかも分かんないですが、食べるっていう字は、人が良くなるって書くんだよな。人が良くなる。食べることによって、人間は良くなると思うんです。

食べ物によって人間の健康も左右されるし、これは体ばかりじゃなくて、人格も変わってくると思う。

大体私ぐらいの高齢者になると、あなたの好きな食べ物何ですかって。好きな食べ物を聞くと、大体その人の性格が分かる気がします。

私も前からソバ打ちが好きだ。ソバをやってたときも、うまいソバって何だっと思って考えると、まあこれはキリがないんだけども、やっぱりうまいっていうよりも先に、口に入れるものだからね。人の体に害のないような食べ物、そういうのは優先されると思うんだな。

そういうことからすると、ソバを作ってるときから、私は無農薬。あとはまあ、化学肥料はね、全然使わないっていうわけにはいかないけども、なるべく頼らない。そういう作り方をしている。それがもの作りの大事なところだなあと考えてます。

だって、現代病は、ほとんど口から入るものが原因だから。

だから、食べ物っていうのは、非常に大事なんだよ。現代病は特に自分で病気を作ってるっていうのも過言でないような気がします。

福大の金子信博先生（福島大学食農学類名誉教授）が前に来て、オーガニック栽培をやろうという話があった。農地は耕さない。雑草が茂ったまま、そこに作物を作る。科学肥料ももちろんやらない。確かに感ずることが多々ありました。

しかし生産者の立場から見ると、一定の収量がないとやっていけないことも事実。

まあ金子先生に言わせると、トラクターもいらねえ、化学肥料も買うことねえんだから、そろばん合うんでねえかって。といっても割り切れない。(笑)。

—トラクターもいないんですか。

長正：そうだな。耕す必要ねえんだ。もちろん農薬は使わないな。

—ただの、普通の土地に種を植えて。

長正：そうそう。

この前ね、金子先生のゼミ生で、今はもう卒業したけども、ある学生が研究して、ヒマワリを栽培した。ここで彼に発表してもらったんだけど、いま言ったように、全然、不耕起栽培。何もやらない、肥料もやらない。そこにヒマワリの種をまいた。

一方の隣は、ちゃんと耕して、化学肥料をやって、種をまいて、ワーツと育て、花が咲いたら、確かに化学肥料をくれたほうは、大きい花が、立派な花が咲いた。どうも、何もやらないほうはちょっと物足りない。だけど、それをポチポチ切って、切り花にして、瓶に差した。1週間くらいで、大きい花はしおれちゃった。野生で育てたやつは、1カ月たっただけでもしおれない。これは本当に研究結果です。人間もそうだと思うの、人間だって。うまいものばかりを食べてると、そうなるし(笑)。だから、あの考え方っていうのは、私はすごいと思うな。ただ、それを今すぐ実践できるかっていうふうになるとね。収量の計算、やっぱりそろばん合わないし難しいから。

そのためには金子先生は全てやるんでなくても、例えば肥料に頼らないのであれば、今やっている、その米のおがくずだとか、あるいは山の木の葉とか集めて、本当の完熟堆肥を作れば、化学肥料以上の肥料効果はある。一方ではそういうことをやりながら、自然農法、そうやっていけばいいんじゃないかという話。確かに理論的には素晴らしいと思うので、いくらでも金子農法に近づくように、進めていきたいとおもう。

あと、ちょっと見慣れないけど、あそこの右側の、ちょっと箒(ほうき)みたいな赤いやつがあって。アマランサス。分かる？

—アマランサス、おいしいですよ。

長正：雑穀なんだよ。キビだとか、そういう種類。ただ、あれは原産が南米かな、それでNASAの宇宙食なんかに、あれは使われてるな。栄養価が高いの。ただ、ああやってわれわれも作ってみたいんだけど、これはまた大変なんだ。実がエゴマの半分ぐらいだ、ちっちゃい。これは、いくらなんでも、われわれはちょっと無理だっていうことでやめたんです。

収穫が大変だし、あとは選別。アマランサスって、脱穀自体は簡単なんだけど、細かすぎて、ゴミと分別するのが、もう大変だ。

—今もいろんなことにチャレンジされていらっしゃるんですね。

長正：だから、震災当時、何をやるかっていうときは、ああいうふうに、いろんな雑穀を作ってみたの。アワ、ハウスの中にぶら下がっているのは、あれはキビだと思う。キビも作った。結局、軽い作業だから、どっちかというとな、年寄り向きだなと。そう言ったってなかなかやってみると大変だ。

—これから作ってみたいものとかやってみようとは思っていますか。

長正：やっぱり、さっきのこの少子高齢化とも関連するんだけど、健康寿命を延ばす。体にいいもの、そういう意味で薬草は将来性あるんでねえかなと思ってる。薬草っていうのは、別にどこか遠いところでもなくても野草はほとんど薬草なんです。だから、その中でもね、栽培が可能だとか、あとはいろんな効用なんかも考えて、薬草を栽培したいな。

9. 飯舘村が誇れるように

一先ほどから少子高齢化というところを心配されて、村もなかなか人が増えないというところを心配されていらっしゃると思いますが、これからの飯舘村がどのようになってほしいですか。長正：まあ村に対してっていうと、また話が大きくなってくけども、私がずっと、役場に入ったときから貧乏な村だから、もうちょっとね、住む人が誇れるような村にしたいな。

誇れる村っちゃ何なんだべ。銭があれば誇れるのか・・・とは言えきれない。

やっぱり私は最後は人だと思ふね。誇れるっていうのは、その地域の人が誇れるか。

自然なんていうのは、どこだってあるわけだから、風光明媚な自然なんてね。やっぱり、そこに住んでる人が誇れないと駄目だなと。

誇れるっちゃ、それじゃどういうことかっていうと、例えば農業やってる人だって、私はこういう考えで農業をやってるんです、こういうのを作ってるんです。キチッと自信と信念を持っている人間ですよ。それは誇れることだと。

人づくりと言えれば人づくりなんだけど、例えば、今の子どもたち。帰って来てる子どもは少ないんだけど、少なくともいいから、自分の人生というものを、キチッと自分で誇れるような考えを持っている。そういう人が、1人でも2人でも、村で増えていけば、それは自然と村が誇れることになるなと思います。

これは古い話だけど、私が役場にいたときは、全国から、2日に1団体視察団が来てました。もう北海道から九州まで。どうして、何のために飯舘に来るのか。村長や私の話ではなく、飯舘村のいろんな人に会って話を聞きたいということでした。だから対応も、役場の職員に限らず、村民の方にもお願いしました。

例えば村民のなかには、全国の酪農青年発表会で最優秀に輝いた人、全国和牛改良発表会で最優秀賞に輝いた人、また花卉では、独自の土づくりや栽培技術を持って、市場でも一目置かれる人、インゲンやキュウリでは、県などの農業研究所の研究にも勝るとも劣らない、独自の栽培技術により、素晴らしい生産をしている人。そうした人たちに会いたい話を聞きたいという研修が多かった。

それから「若妻の翼」って全国的に知られるようになると、実際に参加された方に、視察研修の講師をお願いもしました。

「若妻の翼」についてちょっと詳しい話をします。飯舘村では若いお嫁さんを、平成元年から5年間海外研修事業を実施しました。

若妻の翼に行ってきた人の話を聞きたいとの研修も多くありました。それは研修に来る人たちは農家のお嫁さんが殆どですので、同じ農家のお嫁さんが若妻の翼に行った人の話を聞くと、お互い共通している悩みなんかがあるわけですよ。農家のおしゅうとさんの権限が強いのは、どこだって同じわけだから。そういう家で、自分がどういうふうに、子育てをしたり、農作業をしたりしたか、そういう苦労話は共通してるわけですよ。

村で若妻の翼を募集するとなっても、お嫁さんが率先して「私、行きたい」って手を上げるのは、大変だよな。おしゅうとさんもいるわけだし。おしゅうとさんから言わせると、「何の、おら今まで苦労してきて、海外へ、どこさも行かねえのに、なんでお嫁さん、先やんだ」なんて話もあるわけなんだ（笑）。そんなの当たり前めえだ。そんな中で、「私、行きたい」なんて言ったら、「何言ってるの」って言われるわな。

だけど、実際に行かれた人のなかにはね、逆におしゅうとさんから、「あんた、今度の若妻の翼に行ってきたさい」と勧められたという人もいた。これは嬉しかったと思うね。

また、若妻の翼に行ったとなると、10日間なり家を空けるわけだ。準備のためにも、何回も集まらないといけない。そうすると農作業なんかができない場合がある。でも、夫も子どももおしゅうとめさんも協力してくれて、参加できたという人もいる。そういう、今までにはなかったような家族の絆というのを感じることができる。そういう農家のお嫁さんの共通の思いが、全国の農家のお嫁さんが視察に訪れる、大きな要因となったと思われます。

それで、当時、1回目に行ってきた19人。空飛ぶ19人は、いま言ったような、行くまでとか行ってきてからとかの具体的な話を書いた本を出したな。それを読んだ全国のお嫁さんが感銘を受けたんだな。それでどんどん視察に来た。あとはその本が欲しいと言って、最初、1000冊くらいだったのを、最終的には5000冊くらい印刷したのかな。

結局「村が誇れる」っていうのはどういうことかっていうと、村の人たちが、それぞれの立場で、自分の生き方なり何なりに誇れるものを持つ人たちであれば、村は誇れるものになると思うんだ。だからこれから、特にそういう誇れる人が多くなってほしいね。人口が多ければいいっていうんでなくて、そういう誇れる人がいることによって、村はよくなっていくんだろうと思うから。

すると、ああ、ああいう考え方の人が、飯舘村のこういう物を作ってるんだとか、そういうふうになると、自然とその物の付加価値が高まっていくわけだよね。そういうところが大事なところかなあと思うんですね。

この日、長正さんのお話を聞いて、長正さんが大事にされてきた飯舘村の人々の暮らしが、とても素晴らしく興味深いものだった。そして、その飯舘村を作ってきたのは何なのかを知りたいと思い、震災前の飯舘村について、二度目のインタビューを行うことをお願いした。

10. 震災前の飯舘村

★合併して飯舘村に

一本日は、追加のインタビューを受けていただき、改めてありがとうございます。前回は飯舘村の現在について、興味深く聞かせていただきました。

震災のことで震災後のこと、飯舘村がどういうふうに進み出しているかというお話を聞くことができたと思います。私は、いまの飯舘村のコミュニティーが素敵だなと思ったのですが、それには震災前の飯舘村の雰囲気が大きな影響を与えていると思います。

そこで、もう少し震災前の飯舘村の様子をお聞きしたいです。

—長正さんから見た、震災前の飯舘村について教えてください。

長正；私は、昭和41年の4月から役場職員として働いた。当時、私が昭和41年に役場に入った頃の、村のざっとした状況を思い浮かべると…その10年前、旧大館村と旧飯舘村という二つの村が、昭和31年に合併をして、飯舘村になったわけ。

それからざっと10年たって、私が昭和41年ころ役場職員になったけども、その当時としてどういうふうに進み出しているかという、分かりやすく言うと、非常に貧乏な村。その当時、福島県内では90の市町村があったけども、今は50ちょっとくらいかな、その当時は90市町村あった。それでいろんな統計の所得番付、一人当たりの所得水準なんかを見ると、飯舘村が一番びっぴ（※ビリ）だった。だからそういうふうに進み出している、非常に経済的には大変な状況。

あともう一つは、飯舘村は面積は多いんだけど、ちょうど二つの村が合併したために、二つ村というのが対等合併というか。面積も同じ、人口も大体同じ。合併した当時は、二つ合わせて約1万3000人くらいいたわけだ。そういうふうに進み出しているんだけど、対等合併だから、旧村感情というのが強いんだ。「おらが本家だ」という。吸収合併ならそれは違うんだ。

—立場が対等ということですね。

長正；立場がいろんな意味で対等なために、それが。旧村感情というのとちょっと大げさだけれども。例えば役場庁舎を、新しい飯舘村になった場合に新しい飯舘村の役場庁舎をどこにつくるか、これがもめたのよ。まずひどい。

あとは、そういう行政関係ばかりでなく、農協だって二つあったべ。だからそれを合併して一つの農協にするにしたら、これまた、じゃあ本所はどこに置くんだとか。あとは、例えば婦人団体、婦人会だって二つあったんだ。消防団だって二つ。みんないろいろ、対等合併だったから、いろんなそういう「自分たちは譲れない」というか、役場の庁舎一つつくるにも「おらが本家だ」と。

そういうことだから、結局、合併して形は結婚したんだけど、本当の夫婦になってないわけ。お互い、コップの中で綱引き争っているわけだから。そういう状況だから、村民生活だってよくなるわけ。結果として、一番所得水準がびっぴの村であるわけだ。

私が役場に入ったときは、何しろそこを改善しなきゃ駄目だなと。何とかそれを、その旧村意識というのをなくして、村民がみんな手をつないで力を合わせるような村になれば、いい村になるはずだから。

—そうですね。

長正；じゃあ具体的にどうやればそれができるのかと。俺のやる仕事はそれが一番だと思った。

役場職員として。役場職員だっていろんなポジションで、税金を取る仕事とか、いろんな仕事があるわけだけでも、何やってもいいんだけど、一番の役場職員としての大きな目標は、みんなはどう思ってたか分かんないけど、俺個人としてはそう思ってた。何しろ飯館村というのは、さっき言ったいろんな問題を解消して、何とか村民全体が力を合わせれば村はよくなる。そのためには、そういった旧村感情とか、そういうのをいかにしてなくすか。

これはもちろん俺ばかり、私だって当時はまだ若いペーパー職員だし、役場職員だっていろんな、ベテランの人らも、村長もだってそれなりに思いはあってやってるわけだから、努力はしてるんだけど、なかなかうまくいかないんだ。

そんなことで、常日頃、私もいろんな仕事をやってきたけども、どうも腹の中の虫が治まらないわけだ。こんなことやってたんでは駄目だよな。役場の仕事だってこんなことをやってたんでは駄目だな。みんな一生懸命やってるんだけど、目先のことばかりで、さっき言った大きな問題をどうするかというふうにはならないな、とね。

それで当時大きく変わったのは、私は41年に役場に入ったけども、それから15年くらいたって、昭和55年に大冷害、ものすごい冷害があったの。冷害というのは、米が取れない年。飯館村は、そんでなくても気候は厳しいんだけど、その当時はものすごい大冷害で。どういう状況だったかという、米が、稲作なんていうのは5月に植えたら、あと成長しないんだよ、秋まで。

寒くて成長なくて。植えたやつ、ちょっと伸びたくらいで枯れちゃう、そういう状況だから。だから米なんて収量はゼロ。自分たちが食べる米も取れないわけだから。あの当時いろんな所から輸入した。当時、日本が今のように、米が国内だけでも供給できるほどそんなに豊かではなかったから。あの当時は飯館村ばかりでなくて阿武隈山系、北上山系、特に太平洋のやませの影響を受けやすいところは、ほとんど冷害だった。北上山系もすごかった。そういう状況だから、非常に米不足になって、外国から米輸入して。考えられないけど、今では。私から言わせると、外国米なんてのはまずくて食えない。本当だよ。だけど米は米だから。

11. 村の転機—第三次総合振興計画

—大変だったんですね。

長正；そういう状況が昭和55年にあって。そのとき、私もそうだけでも、特に私らと同じく、その当時いた若い人たちは、「やっぱりこのままでは。こんなことでは駄目だな」という、そういう思いを強くしたんだと思う。

そんな背景があって。あるとき、当時の村長山田健一さん(故人)、合併して3代目の村長だったけど。その村長は職員とも日常的にお酒飲みなんかやっていて、職員との親交も深かった。あるとき酒飲みの中で村長に、私は「村長、何やってんの。こんなことで、村なんてよくなるはずねえべ」。いろいろ酒飲んだ勢いだから実直に言った。村長は「何語ってんのおめえ、できんならやってみろ」と言われた。私は「ようし、やってやる」ってな感じ。

そして具体的に何をやったかっていうと、その当時大冷害があり大雪害などもあって、飯館村として新しい総合計画を作るというのを、山田健一村長が言ったわけだ。飯館村として第3回目の総合振興計画だったんだ。

—振興計画。

長正；それで村づくりの計画になる第3次総合振興計画を作ることになり、私は当時企画係に所属していたので、総合計画策定の担当を担うことになった。

大体私らもその当時、地域の若い人たちといろいろ付き合いもあったから、そんな大きな村でねえわけだから、1万人くらいの人口だから、村民のなかでも「あの人はなかなかこういうところ長けてるな」とか。「あの若者はこういうところの知識や考えも深い」などと、大体そうした人材が見えていた。

それで総合計画つくるとき、何が大きな課題かというのは、一つは旧村感情をどうやってなくすかと。

もっと詳しい背景の話をする、私が予算編成する仕事を担当していた際、担当者が予算案

まとめると、村長が案の段階で一通り目を通すわけだ。すると村長が何を一番先に言ったかという、「細かいことはともかく、旧村単位に道路の予算や学校関係の教育費、これを旧村単位に分けてみて、旧村のバランス取れてなくては、議会は通らねえんだ」と。旧村感情が強いから。特に議員なんか18人いたんだけど、不思議と旧村ごとに9人、9人に分かれるんだ。人口も何も同じだからそうなるわな、結果として。だから、そういう状況の中では予算だって、旧村単位にバランスが取れていないと、それでは議会は通らねえんだから。

なるほどなど。村長の立場も分かる。だけどそんな、旧村のバランスを気にしていてもな。もっと外部に向かって、村がどうするかというところまで神経が行かねえわけだ。やっぱりこの旧村感情というのをどういうふうに解消するか。これが一番の飯館村の今後の大きな課題だなと。

具体的にはどういうことをやったかという、常日頃商工会の若い人たちや村の若い人たちとの話あいのなかで、大体の青写真はできつつあった。

それは「センター地区構想」だった。まず役場庁舎をどこにすっぺとか、運動会やったり、村民運動会を今年はこっちでやればとか、そんなことでは駄目だから、まずは役場庁舎をつくらせて。中学校だって統合して、統合中学校が一つで十分なんだよ。教育や学校の先生だって充実するし、子供たちにとっても、ばらばらやっているよりはいいわけだ。そういうことを考えて、村のほぼ中心地に公共施設を集中整備する「センター地区」でした。

12. センター地区構想

一ちょうど村の真ん中ですね。

そう。だからこそ「センター地区をつくっぺ」という構想を出した。そうして役場庁舎もそこにつくれば、誰も文句言うやつはいねえ。あとは、中学校だって統合したほうがみんないって分かってたって、みんな、旧村単位の役員の下では、「おらほうきつったほうがいい」と言って、これもまた、まとまんない。「じゃあ統合中学校も、ここさ、役場と一緒につくっぺ」と。そうすれば。あとはでっかい、いま現にできてっけど運動公園、野球場だつてつくれば、みんなそこで集まって、あっちだこっちだやってるんじゃなくて、村みんなが集まって、そこでスポーツ大会だつて何だつてできる。そういう「センター地区構想」というのを出した。

一どのようにして「センター地区構想」を思いついたのですか？

そういう構想がなぜ出てきたか。私は個人的にも、旧村感情を解消するには、基本的にそういう大胆なものがないと駄目だなと。私だけでなく、いろんな地域の若い人たち、例えば商工会の青年部の人たちもそう思っていたし、農協の青年部の人たちだってそう思っていたから。そういう人たちの力をうまく組み合わせれば、センター地区を、これを夢でなくて本当に俺は実現するなど。ある意味では内心、自信を持っていた。

それで総合計画を作るときに、私は独断と偏見で策定委員に、そういうきちんとした目的を持っている人間を選んだ。別に肩書きで、あの人何々委員だからとか、あるいはPTA会長だからとか、そんな肩書きは一切関係ない。1万人くらいだと、誰がどう考えてるというのは、付き合っていれば大体、頭の中が見えるわけだから。「ああいう人間が策定委員会の中に入れば、必ずそういう構想は実現する」、別に俺だけでなく、そういう人たちもそう思っていたわけだ。

策定委員会は三班とした。一つの班は、生活舞台の建設をどうするか。具体的に言うと、センター地区構想なんだな。そういうのを作った。

二つの班は産業。やっぱり米がなかなか厳しい状況で、畜産をどんどん増やしたんだけど、なかなか容易でない。そういう中で村の産業をどうするか、これが2番目の大きな課題。

三つの班は、人づくりというか、教育だな。これは学校教育も含めて。あとは小さい子供も含めて。あとは、婦人会だとか青年会なんかも含めて、あちこちでやっているよりは、みんな力で合わせるような、大きな意味での教育環境というのをつくらせた。大きいいえば、三つの課題。あまり分けないほうがいいんだな、小さいほうが。目的もはっきり。

そういう策定委員会をつくって、その中に、「あの人は教育関係に非常にいい考えを持って、あの人は産業関係、あの人はそういったセンター地区の構想に、なんてな。そういう下地をばっと、一班10人くらいだけでも、そういう若い世代にはいつていただいた。

あとは、地域の人たちだけでは駄目だから、役場の職員とか、農協の職員とか、商工会の各機関の職員なんかも、そこにうまく組み合わせて、1年間ずっと議論して。何のことはない、第3次総合計画の大体、青写真ができて、最初の大きな生活舞台班ではセンター地区構想が、これから村のために必要だという構想ができた。

それで、問題は若い志のある人たちで案をつくったんだけど、要は自治体は議会を通らないと何にもできないんだ。権限があるのは議会です。村長がなんぼいい素案を作ったって、議会で承認しなけりゃ、これは絵に描いた餅なの。これは同じ。だから「計画を作ったって、果たしてこれが議会を通っぺか」というのが最大の悩みというか、大きな課題だった。議会の議員の数も18人が、旧村単位で力が非常に拮抗している中で、果たしてこういう計画が本当に通るんだべかなと。

しかし、ものは案ずるより産むがやすし、そういう例え言葉があるように、議会にかかったら何のことはない、すんなり通っちゃった。俺も信じられなかった。後で何人か議員の人に聞いてみたら、「何だかんだ言ったって、これから村を担う若い人たちが作った計画だから、何もわれわれ反対したってしょうがねえべ」と。確かにそう言われると、村を担うような若い人材を私の独断と偏見で委員の中に入れてから、そういう人たちでまとめた案なんだから、われわれがもうどうしようもねえべと。若い人たちがそれでいいと言うなら、それでいいんでないかということが、大多数になって、反対者は誰もいなくて、みんな通っちゃった。

もちろん議員の人たちも、そういうのは薄々、議員一人一人も考えてたんだよな。こんないつまで旧村の綱引きやってたって、村はよくなんない。何か思い切った施策を掲げる。そういうのが内々にあった。そういうのもあって、議会も通った。

13. ミートバンク事業

一すごく大きなことでしたね。その後、村はどうなっていったのでしょうか。

長正；大きなことだった。だから、飯舘村の過去というけれども、俺は飯舘村の過去の中では、そこが一番のスタートラインだったんじゃないのかな。

具体的にそのあと、どういうふうに変わっていったかという話になるわけだけでも。山田健一村長は、その計画を作って、10月に無投票で4選になった。総合計画を作って、それをこれから推進していきたいということで、継続した。

その後、どういうことになったかということ、村づくりの大きな課題の2番目の産業振興の面。やっぱり飯舘村は貧乏な村で、何とかその辺をどうするかという中で、具体的に言うと、「ミートバンク事業」というのをやった。これは、この当時は全国でも画期的なことなの。牛肉を宅配するって。ふるさと宅配便というやつ。

一現在のふるさと納税のようですね。

長正；そういうのを。これもここまで持ってくるまでは、もちろんそんなに、私一人のあれでそんなことはできない。やっぱり総合振興計画を作る段階で、村の農業、産業をどうするかということ。

特にいろんなことはあったんだけど、何しろ米はなかなか条件的に難しいと。われわれの先輩も、そういう意味で牛を導入、酪農とか、畜産を。畜産というのはどちらかというと気候変動に左右されないから、牛というものをずっと振興してきたんだけど、いまいちゃっぱり伸びないんだ。その総合振興計画で、みんなで議論した中では、なぜ伸びないかっていうと、何のことはない、端的に言うと第1次産品でみんな売ってるから、付加価値がないわけだ。

だから、例えば牛の問題一つ取ったって、当時牛というのは繁殖経営といって、子牛を売る経営だった。小さい子牛を産んだらば10カ月くらい育てて、それで競り市にかけてお金を換える、そういう経営だった。子牛を飼って、一定期間飼育をして売る、これは飼育経営。だから牛の世界でも大ざっぱに言うと、経営の仕方は二つあるわけだ。子供を売る経営、あとは子供

を買って、いい肉牛に育てて売る経営。だから、繁殖経営だけでは駄目だと。地域の中で飼育をして、牛でなくて今度は肉として売ると。いわゆる、今でいう6次化だわな。そういうのをやらないと、いつまでたっても貧乏な、第1次産品だけの提供の村では駄目だべと。

じゃあどうすっか。出てきたのがこういう考え方。やっぱり牛というのはブランド化しないと駄目だべと。当時だって松阪牛とか、神戸牛とか、米沢牛というのは全国に知られてるんだけど、知られるには、いつかどこかの時点でその地域の人たちが、そういうブランド化の活動をしたからそういうふうになってるわけだ。誰も黙ってたのではないわけだ。飯館村もそういうふうには、やる以上はブランド化しないと駄目だべと。簡単に6次化なんていったって、誰も買ってくれなくては、6次化になんねえべと。

じゃあ具体的に何からやるか。「牛肉の宅配便をやる、どうだべ」と。もちろん当時、飯館村で、牛を屠殺して解体して肉なんて、そんな加工場はないわけだから。全部、農協の今の郡山のあそこの食肉センターで加工して、肉にしてもらって、肉をパック詰め。そこまではできるわけだ。そうしたらそれを持ち帰って、飯館牛という名前で売って。

具体的にどうだということも、ここまで積み上げるまではいろんな苦労をしたんだけど、結局大ざっぱに言うと、こういうふうには六つのコースを作った。5万円というのは、肉でも最高の牛肉。サーロインとかヒレ肉とか。あとは、3万円はそれ以下の、真ん中ぐらい。あと2万円というのがあったんだ。そういうのをセットにして、会員を募集したわけだ。これも、会員募集したって応募者がいなくても駄目なので、それも心配だった。

—今でいう「サブスク」のようなシステムですが、当時ではかなり画期的ですね。

長正；そうだね、村のみんなが苦労してやっていると、朝日新聞が全国版に出してくれた。朝日新聞は、飯館村のイメージを変えた最大の功労者。ほかにもいろんな新聞社が記事を出してくれたんだけど、朝日の読者の反応は特に大きかった。

今でも忘れないんだけど、この記事は5月6日に出たんだ。そうしたら、次の日の5月7日の朝6時くらいに、役場から俺に、「いろんな電話が来て困ってる」って内容の電話が来たの。役場の電話番号をミートバンクの申し込み先にしてたから。

村長を頭首に据えて勝手に「いいたてミートバンク」なんてつくったけれど、村長が頭取だからこそ、民間でなくて、自治体やってんだなっていう安心感があるわな。そこも一つのみそなんだ。

いずれにしても、この新聞が出た次の朝、役場から「すぐ来い！」って呼び出された。当時、役場には電話が6回線か7回線あったけど、申し込みの電話でいっぱいなの。私一人ではもちろん対応できない。8時半に出勤してきた役場の職員らも、「何が起こってるんだ」って驚くわけ。職員100人、だれも何が起きてるか分かってなかった。

—ミートバンクの件は、役場職員に伝わっていなかったのですか。

長正；関係してる一部職員と農協職員の一部以外には伝わってなかった。役場で税務の仕事をやってる人なんて、全然関係ねえから何も知らない。そんで、職員には、「説明はあとでするから、とりあえず問い合わせ者(応募したい人)の名前と電話番号と住所を聞いて、それを記録してください」、問い合わせ者には、「あとで詳しい資料は送りますから」という対応をした。

パンフレットとかにも、事務局の所在地が飯館村役場内と書いてあって、そういうところで、お客さんも詐欺ではないなと思ってくれた。

—郵送できる範囲が決まっていたようですが、どのあたりまでが対象だったのですか。

長正；当時は、大ざっぱに言うと、東北圏内と関東圏内くらいだった。でも今みたく、ヤマトだののように冷凍便はもちろんねえし、宅配便だってスムーズにはできねえ状態だった。肉だから、翌日配達しないといけない。そうすると、やっぱりせいぜい東日本。関西まではちょっと無理だな、静岡の辺りまで。

まあ配達についてはよかったんだけど、一日に応募が500件か600件あったもんだから、「そんなに肉、供給できんのか」っていう話になるわけだ(笑)。でも当時、農協の畜産担当職員のような実務者レベルの人たちの間で、「農協の人で肉をどう確保できるか」とかのすり合わせはしてたから、自信があった。あとは、ふるさと宅配にしてたから、送るのは肉だけだな

くて、春だったらばいろんな山菜を一緒に入れてたけれど、農協の婦人部なりなんなりに動員かければ、山菜の提供なんかもできるな。供給するための大体の下地はできてたわけ。だからそんなに私は慌てなかったんだ。

とはいっても、さすがに数が多すぎた。何だかんだいって最終的には、1回目の発送のときは、700か800件くらいあったんだ。年に5回送るという約束で、1回目の配送が5月の予定だったから、5月の7日に電話が来て、その月のうちに700件の肉をそろえたのよ。いや、大変なの。

あとは8月だって、8月は8月で、また肉だけじゃなくその季節のものを入れなきゃいけないし、秋だったらキノコ、冬だったらしみ餅とか鏡餅を送るとか。そういうところ。こちらの思いとしては、肉はメインだけでも、農協の婦人部の人たちでやってるいろんなものをそこに組み入れれば、地域全体としての農業振興なり、地域の活性化につながる、そういう腹づもりもあったから、いろんなメニューを。

で、てんやわんやしながら、夜も寝ないで準備して、なんとか1回目は発送終わった。でも、発送するたって、当時は保冷剤なんてのはねえの。ほんで、ドライアイス買ってきて、それを細かくしてナイロンの袋に入れて保冷する。生肉だから、いくら真空パックしたって、やっぱり翌日配達範囲。そういう意味でも、配達する地域というのは限定されてくるわけだ。そういうことで、いろいろあったけども、5月の第1回目は800件くらい。そして、8月の2回目になると、1000件超えてたな。最終的に、秋になると、1500件になったね。

一申し込みされてくる方々というのは、新聞などで興味を持った方なのでしょうか。

長正； そうだね。一番大きかったのは、俺いまもビデオ編集したのを持ってんだけど、日本テレビの「ズームイン!!朝!」っていう番組。若い人は分かんないかな？徳光さんっていう人がメインキャスターで、全国ネットワークで地域の問題を提供する。朝の番組で、すごい人気があった。福島中央テレビで、この宅配の内容とか、広い大火山牧場で牛がのびのびと草食してるような状況をとかを織り交ぜて、このミートバンクを紹介してくれた。だから雪だるま式にどんどん会員が増えていった。それはそれでよかったんだけど、そこで出てきたのが、牛肉のバランスの問題。われわれもふたを開けてみて分かったんだけど、5万円コースがうんと多いのよ。バラ肉なんかより、ヒレだとかサーロインだとか、そういういい肉を求める会員が多い。そうすると困るのが、ヒレとかサーロインというのは、牛の肉の全体からすると2割か3割くらいしかない。残りは中肉とバラ肉。だから、5万円コースの分の肉を確保しないとなくなると、残りの売れない肉どうするんだと。でも、畜産農家に「これだけしか、要んねえ」なんて借金負わせるわけにはいかない。牛は1頭は1頭として買わなきゃなんない。でも宅配で送る分はいい肉だけ。じゃあ売れない肉はどうするんだ。これまた悩み。

でも、みんなこうやって走ると、いろんな知恵が出てくるのね。「バラ肉が余ったらば、バラ肉でバーベキュー大会やっぺ」、こういう話になった。このバーベキューというのも、われわれが先駆者というか。牧場の広いところで、みんなでわっとやれば、焼肉会費2000円で食い放題といえ、人は集まるんでねえないか。

でも、バーベキューといたって何も道具がねえんだよ。じゃあどうやって道具そろえんのか、鉄板なんてはすぐそろえられるけれども。鉄板の下で炭起こしたりすんのはどうやっぺ。そしたら役場の建設課から、「U字溝の余ったのいっぱいあっぞ」「古い道路から取ったU字溝があんだ。あいつ丁度いいぞ」と。U字溝をだあっと並べて、その上に鉄板乗せて、炭を起こして。そうすると、いいのよ。

一すごい発想ですね。

長正； これに人が来んのかって話だけど、飯舘村っていうのは、マスコミがよく取り上げてくれるの。8月の4日の日曜日だったな、大火山牧場って広いところがあるんだけど、臼石(飯舘村の地名)から入る山道の先にあって、砂利道で、夏だったらば砂埃がわんわんと上がる、非常に不便なとこなんだ。そうしたら、当時の山田健一村長が、「やる以上はみんなに迷惑かけてはできないんだから、いろんな建設業者の協力もらって、散水車で水まけ。」と。商工会の青年部の人たちも、農協の青年部の人たちもみんな、草刈りだって何だって、ボランティアで協力してくれた。

当日、8月4日、人が来たんだよ。どんどん、どんどん。福島から川俣に来る道が渋滞なんだ。

原町からもずっと。そうして白石から山道に入っていくわけだ。でも、村長が「不便をかけては駄目だ。駐車場もちゃんと、ブルドーザー頼んでやれ」って言って、駐車場や会場はつくってた。

—大胆ですね。

長正；でも、あまりに人が来て、今度は牛肉が足りなくなっていく。余って大変だって言ってた牛肉がなくなっちゃった。でもあのときの山田村長は偉かったな。「約束したことは、守らないとならねえんだ。肉ねえなんて言ったらば、『飯館村は、うそこきだ』って。今までの汗かいたの、水の泡になるんだから、福島市だの原町市（南相馬市）に行っ、肉屋から牛肉みんな買ってこ（＝買って来い）。予算なんてあとで取ったらいいんだから。まず、いま来てるお客さんに、うそこいては駄目だ」って。ほんで、商工会の青年部の若い人達が肉買いに行っ、だからあとから来た人は、むしろいい肉を食べた。ヒレだってサーロインだって何だって、買い集めてきた。バラからだんだんランクが上がってく。

こういう村を挙げた事業をやっ、村民が一丸となってやっていかないと、村はよくなねえんだってというのが、だんだんみんな分かってきた。だから、若い人たちも協力的にやっ、ボランティアで草刈りを2日も3日も行ったり、道路の砂ぼこりが上がらないように、前の日は散水車でずっと水をかけて。本当にすごいなと思った。そうなってくると、マスコミが話題としてうんと取り上げてくれるわけだ。元気のある村だとか、アイデアのある村だとか。

14. 村づくりは人づくりー夢創塾、ほら吹き大会、若妻の翼

—村が一つになって動いていたんですね。

長正；そうだな、あともう一つは、人づくりなり何なりとも関係するんだけど、総合計画で、若い人たち、集まった人たち、つまりわれわれがつくったこの思いは、村のきちんとした計画になったということ。総合計画を作るときに独断と偏見で策定委員を選んだと言っただけでも、俺の腹の底には、こいつはいろんな意味でいい人間だって、将来この人間は村を担うような人間をこの中でつくっていかないと駄目だなという思いがあったんだ。結局、村づくりというのは人づくりだから。何だかんだ言っ、やれる人材を育てないと何にもなんない。書類なんてなんぼ綺麗なのを作っ、それを実行できる人材がいなくては、絵に描いた餅になるわけだ。

そうした思いで、村を担ってもらいたい人たちに声をかけ、「夢創塾」ができた。

この塾のメンバーは、後日村長になられた方、議会議員や商工会長、消防団長など、結果的に村の主なリーダー的役割を担っている。

—長正さんの先見の明が感じられる結果ですね。

長正；夢創塾の話をもう少し詳しくすると。総合計画策定委員会の中で、「われわれは計画作りが目的ではないんだ。それを実現するのがわれわれの目的だ」という意見が強かった。だから村から何とか委員なんて委嘱されなくても、われわれにはそういう行動をできるような何かが必要だべというのが若い人たちの中で広がっ、「夢創塾」という塾ができたの。夢を創る。創るっていうのは創造の創、夢創塾。当時、初代の塾長になったのが、前村長の菅野典雄さん。夢創塾というのをつくっ、初代の塾長に菅野典雄さんになって…その後、塾長いろいろも替わっっていくけど。

その当時、じゃあ具体的に村で何をやっべと考えた。一つポイントになったのは、毎年、正月にはどこの町でも市でもやってるけど、名刺交換会みたいなものがあるわけだ。飯館村だっ、同じ。あれはあれでいいけど、あんなことをやっ、いつまでも何にもなんねえ。もっと村民の人たちが、夢を語るような場所にしたらいいんでねえかと。新春のつどいなんだけども、そこで、ほら吹き大会やったらどうかと。

「ほら吹き大会」やるだけども、これまたクレームがついたんだ。議員だ何だが俺のここへ来て、「なんだ、新年早々ほら吹きなんて、こんなばかな話がどこにある」。まあそう言われれば、何とも返事のしようがない。「じゃあ分かった」って言って、正面のタイトルは

「初夢披露会」にした。で、サブタイトルを「ホラ吹き」と。

—柔軟！すごいですね。

長正；今度の新春村民のつどいは、単なる名刺交換でねえよと。「みんなでそうやって夢を語るんだ」と言ったら、多くの人が集まるようになった。肩書きなんてなくなつて。実際やってみると、みんなホラを吹いて、面白おかしくしゃべるんだけど、言ってることにはやっぱり、「村をよくしたい」…そういうのがあるわけだ。するとみんな、そのホラ吹き大会の意義っていうのを理解していくんだな。だから2回目からは、ホラ吹き大会といっても、誰も文句言うやついなかった。反対した人も、「今度は俺にしゃべらせろ」って、そう言うんだ。

1回目のホラ吹き大会で、ちょうどわれわれ若いグループに入っていた、県職員だったんだけど、普及所の女性の職員で…「夢創塾」の中にも入っていたね。その子が飯舘村にしょっちゅう来てて。そこで吹いたホラっていうのが、「飯舘村は将来、村のお嫁さんは海外旅行ができるような村になるよ」、それを、面白おかしく発表したわけだ。そのほかいろんなものあったんだけど。ほんで、今度、山田健一村長から斉藤長見村長（故人）に代わった時、斉藤村長は村長選で選挙公約にしました。「私が村長になったら、お嫁さんを海外研修させます」。して、当選しました。

斉藤村長から「長正君制度設計、うまく考えろよ」といわれて、どうしたらいいべなって。われわれの思いとしては、若いお嫁さんを行かせたいわけ。その当時、ほかの町村では、「婦人の翼」とか「女性の翼」というのがあって、それはそれでいいんだけど、当時の状況の中では、若いお嫁さんでは行ける状況ではないわけだ。だから私はあえて、名前を「若妻の翼」にしたの。年齢は40歳まで。そしたら、これまた、文句出たんだよな。

しゅうと母ちゃんから、「何語ってんだ。おらはこれまで若いときから苦労してきて、そうして何？嫁さんさに海外研修させろ？何考えてんだ、村は」ってな。

—怖いですね。

長正；怖いよな。怖いんだけど、そこを切り抜けないと、村は変わっていけないんだな。特に、私も若いお嫁さんたちと集まって、いろいろ話し合う機会はあったんだけど、その中で、お嫁さんが何を言うかっていうと、「5月の連休来るのが一番嫌だ」っていう。「なんで？」って聞いたら、「5月の連休は、サラリーマンはみんな家族でドライブに行く。農家のお嫁さんは、田んぼで肥え散らし（肥料撒きの仕事）だ。農作業だ。」と。別に、連休に農作業やらなくてもいいんだけど、農村社会ってのは、そういう目に見えない所があるわけだよな。「ましてや、おしゅうとさんが一生懸命働いてるときに、若い夫婦だけドライブに行くわけにいかねえがや。サラリーマンはいいな。だから、5月の連休ってのは、おらは一番嫌だ。」なんて言う。なるほどなあと思った。あとはどういうのがあったかという、当時の農家っていうのはみんな、その家のおやじさんが財布を握ってたわけだ。すると若い息子さんなりお嫁さんがいくら一生懸命働いたって、例えば花作って売ったって、その金はみんなおしゅうとさんの口座に入っていくわけ。どこ家でもそうなんだ。何が嫌だという、自分の子供が幼稚園なり小学校に入ったときに、おしゅうとさんに、給食費ちょうだい、何何費ちょうだい…これはつらい。これはつらいよ。

そういうことを考えると、農家のお嫁さんの一番の問題はこういうことなんでねえかな。逆に、農業がつらいとか、そういう人はいないんだ。仕事がつらいんでなくて、目に見えない農村の封建制みたいなのが、依然としてあるわけだ。

自分たちで切り盛りしてる農家は、真っ黒（黒字）になるくらい稼いでるわけで、お嫁さんの懐にもお金は入るんだから。そういうシステムを改善しないと。そのためにはやっぱり、うちの中でも地域の中でも、お嫁さん自体が発言力が持てるような状況を作り出さないといけない。

—お家のなかでの地位向上ですか。

長正；そういう状況をどうやって作ったらいいのか。私が思ったのは、結局「若妻の翼」しかないんだ。若いお嫁さんを海外研修させていけばいい。もともとのお嫁さん同士の横のつながりがねえわけよ。だから、そういったもんもんとした悩みっていうのを打ち明ける場所もないわけよ。「俺は5月の連休は嫌だ」とか、「おしゅうとさんにお金ちょうだいっていうのはつらい」

とかいう話を打ち明ける場所がない。そこなんだよ。そこをどういうふうにするか。

「若妻の翼」みたいなことをすれば、お嫁さんたちが共同で行くことによって、互いに情報交換ができるようになる。あとはいろんな先進国、ヨーロッパの農村の状況を見てみると、そこでのお嫁さんの立場だとかも全部分かるはずだから。そういうことをすることによって、お嫁さん自体の発言力みたいなものが高まってくれば、結果的に農村のお嫁さん不足というのも変わっていくだろうと思った。

だから、単なる海外研修でなくて、若いお嫁さんに限定した。ただ風光明媚なヨーロッパのお城巡りの研修では駄目だから、実際に農村部に行って民泊をしたり、向こうの農業経営なり農家の状況なりはどういうふうなのかというのを、肌で学んできてもらう。そういう思いもあった。

—いろいろな思いや策略が込められていたんですね。

長正；それをより具体化、充現したのが、当時公民館長だった菅野典雄さんです。公民館長として第一回の研修団長になられ、彼は彼の思いをもって、参加者の若いお嫁さんが想像以上の感動の大きい、素晴らしい内容の研修事業を設計した。彼の能力はすごいと思う。私ら行政マンでは、ああいう制度設計はできなかったと思う。

—「若妻の翼」が始まったのはいつか、覚えていらっしゃいますか？

長正；分かる。この新聞記事に全部あるはずだ。俺が書いたり、整理したのがこれだ。(新聞記事や村の資料をまとめたファイルを取り出す。)平成元年9月に第1回があって、年に1回ペースでやってた。財源は、あの当時やってた竹下総理のふるさと1億円という政策(各市町村に1億円を配布する事業)。だから村の負担ナシでそういう事業ができたわけ。

うちの村でも、1億円で何をやるかいろいろ考えたんだけど、村づくりというのは人づくりだから、俺個人としては、人をつくるようなところに金は使いたいなと。しゃちほこ買ったって、一度見れば言って終わりだから。

ただ、これも具体的にいろいろやってみると、いろんな相乗効果があったの。例えばふつうの家だったらば、お嫁さんが率先して家族の前で「私、今度の村の海外研修に行きたい」なんて言えないわな。でもあるお嫁さんは、夕飯食べてるとき、おしゅうとさんから「あんた、今度の研修に行ってきたさい」って言われた。そうなるくと、また今までとは違った、新たな家族関係ができてくるんだよな。

「若妻の翼」の実施時期の9月は、ちょうど米の取り入れ時期で、農家は忙しいんだ。けども、菅野典雄さんはわざわざ忙しい時期にぶっつけた。こういう発想はさすがだと思った。われわれなら、年明けた1月ごろの暇な時期だといいと発想する。そんな忙しいときに連れて行ったらば、余計に文句出っぺと思ったんだけど、ところが彼はわざとそこにぶっつけた。それはなんでもかという、行く立場からみると、おしゅうとさんが、農家が一番忙しい時期に、むしろ「行ってきなさい」って言うてくれる。そんなのはもうすごい感動だよな。すると、家族の人間関係というのも一変するわけだよ。そこまで彼は、考えていた。俺、感服したね。

—すごいですね。

長正；それで、村としては、行ってきた人たちに、行ってきたぞって報告書を出してもらっただけでいいっていう制度にしてたんだ。けども、参加した彼女たちに横のつながりができて、みんなが集まる機会が多くなったんだ。すると、「うちの子供たちは5人も6人もいたんだけど、うちの父さん大変だったけども、炊事洗濯、私に代わってやってくれた」みたいな、いろんな家族の話だとか、そういうのをみんな情報交換するようになった。「そういう思いっていうのを、何かで残すべ」ということになって、そして、『空を飛んだ19歳の何とか(『天翔けた19妻の田舎もん』)』って、本を作ったんだよ、自分たちで。自費出版で。これは村で頼んだわけでもない、自分たちでそういう今までの研修も、もちろん村にも感謝するけれども、家族にも感謝したい。そういう思いをつづった本を出した。もちろん自費出版で、金もないから、一番最初に作ったのが1000部くらいかな。それが全国のいろんな、農家のお嫁さんの反響を呼んだわけ。みんな悩んでることを、「若妻の翼」は解消してくれたっていう。そういう反響があ

って、どんどん、最終的には5000冊くらい増刷したのかな。

あとは、実際に行ってきた人たちの話を聞きたい、あと、団長に、行ってきた菅野典雄さんの話も聞きたい、そういうことで、全国からいろんな講演頼まれて行ってる。

—想像以上の効果があったのですね。

長正；そういう状況になってくると、若いお嫁さんの発言力が、いい意味で強くなっていくわけだ。結果的にどういうことになったか、象徴的な話でいうと、一番最初に行った若妻の翼の隊員は農業委員長にもなってるし、村会議員になったって女性もいる。だから、もう家庭の中でなくて、地域全体の、村全体の中でも発言力がある。そういう意味では、若い嫁さんが、5月の連休嫌だとか、そういう非常にじめじめした考え方から脱却できたのかなと思うね。

ただ、そうは言ったって、村全体の人が、みんな行けるわけではないから、それはある程度、限定はされるんだけど。5年間続けたって100人弱だから。まだまだお嫁さんいるんだけど。でも少なくとも行ってきた人たちは、そうやっていろんな活動の輪を広げて、村のいろんな要職にも就くようになった。

じゃあ嫁不足解消したか、そう簡単な話ではない。私が役場に就職した頃は、「飯舘村にお嫁に行くなんて、なんであんな貧乏な村さ、なんで行くんだ」と、ところがこういういろんな村おこしだとか、若妻の翼を展開すると、「飯舘村に今度、結婚して行くんです」、「飯舘に!？」って、雰囲気全然違う。「なんで飯舘村に、どんな人と結婚すんの？」と、羨望のようにみられるようになった。そこは大きく変化したと思う。

—飯舘村自体のイメージも向上したのですね。

長正；あとは全国からもいっぱい研修に来ました。私も統計取っていたんですが、多い年は大体2日に1回研修が来てたから、いろんな団体。もちろん役場、私一人でそんなには対応しきれないから、そのテーマによって、例えば「若妻の翼を聞きたい」という人だったら、若妻に行ってきた方にきて話してもらおうとか。あるいは「牛を飼っている人の話を聞きたい」という場合には、牛を飼っている人たちに。そういうふうに、役場というよりも、村全体の人たちで村が、村づくりにみんな関与しているというか、そういう状況があったと思う。

あとは、牛の話はしなかったっけ。牛の話、詳しい話をすると、震災の3年前だったと思うんだけど、東京の芝浦市場って、和牛の解体市場があるんだけど、そこから電話が来た。それはどういうことかというのと、前沢牛だとか神戸牛だとか米沢牛だとか、日本のトップブランド牛という牛肉の市日というのは、決まっているわけ。「その日に飯舘牛も出してください」と、こういう連絡が来た。これは感激だったな。やっと飯舘牛も、全国の一流ブランド牛と肩を並べたという証しなんだ。市場の人たちに評価された。やっと長年の生産者や関係機関などの苦勞が報われた。これから飯舘牛は全国のトップブランド牛として、さらには飯舘村が、活力ある村として、アイディアの村として、今まで以上に飛躍できると思った3年後に、これ(東日本大震災と原発事故の発生)だから、ブランドも村づくりも全部吹っ飛んじゃった。震災前はそういう状況でした。

—せっかくやってきた活動が…

長正；ブランドなんていうのは、補償の仕様がねえよな。地域ブランドだから。算定のしようがない。だけど、地域にとってはそれが一番なんだよ、地域ブランドっていうのが。これは計算機で、はじきようがない。これは何十億、何千億だかも分かんない。考え方にすると。でもそれが一瞬にして吹っ飛んじゃった。

あとは村づくり、みんなで、若い人たちでやってる、そういうブランドもなくなっちゃった。震災前の飯舘村はそういうことなの。そのくらいでいいかな。

15. “地域”の魅力

—当時の第3次振興計画に関わっていた方々は、今何歳ですか？

長正；前の村長が俺と同じだから、80近い。だから、もっとこれから若い世代の人たちに、そ

ういう思いを持ってやってもらえればとは、思っています。

—飯舘牛は、山田さんなどが頑張られているそうですね。

長正；そう。さっき言った山田健一村長の孫だから、彼は。そういう意味では、やっぱりおじいちゃんのそういう情熱っていうのは、つながってんでねえかなと、俺は思ってる。だから、応援もしたいなと思ってる。

ただ以前のような飯舘牛のブランド化は難しいと思う。牛肉の状況も以前のようなサシ(脂肪交雑)の評価ではなく、むしろ飼養の仕方や生産者の考え方等が問われる傾向になっているので、これからの牛肉の市場も大きく変化すると思っている。そのことを山田豊君は先刻承知されていて、それに向けた彼は彼なりの飼育方法を取り入れていると思う。いずれにしても良質の牛肉が、飯舘村から生産されるのは、大きな意義があると思っている。

—「夢創塾」について、もう少しお聞きしたいです。

長正；夢創塾の経過は分かったね。そういう、総合計画の計画をつくるときに話し合った仲間たちが、ただ単に計画書を作るのが目的じゃなくて、われわれでそれを実践していかなければならない。そういう所だ。

それで、まず規約はない。会費もない。そして、反対する人は、反対と言わねえで、交ざらなければいい。やりたい人だけでやればいい。次の授業、何かやるときに、交ざってくればいいんだし。非常にフリーなことで。ただ、真面目ってのは、やっぱりそれなりの学習もしたわな。いろんな講師を招いてきて、話を聞いて、そういうことはやってた。

あとは「夢創塾」って、私みたいに役場の職員もここに入ってたし、農協の職員も入ってたし。あといろんな、各団体でやってる人たちもいたから。そこでいろんな情報交換をすると、自分の仕事にとって帰ると、今度いろいろやりやすいのよ。「こういうことをやれば村民のああいう人たちは乗ってくるな」。農協だって同じだから。だから、「夢創塾」というコップの中でじゃなくて、それがそれぞれの自分の持ち場に行ったところでのそういう情報が、非常に生かせる。だから、(夢創塾は)なくなったわけでもねえな、結局、村づくりというのは人づくりだから。あとは前にも言ったけど、村の魅力とか地域の魅力っちゃ何だって言ったらば、人だよ。ものでなくて。うまいものなんては、どこさだってあるんだ。素晴らしい環境なんてのも、そんなものどこにもあるの。やっぱり人なんだよ。

人はどうやって磨き上げられるのか。専門書を読むのもこれも大事だけど、地域の人たちと意思疎通を図る、これが一番磨き上げられるんだ。今も役場の職員も言ってるんだけど、みんな避難して福島から通ってるんでは、本当の村づくりはできねえんだ。地域の人たちと夜酒飲んだり話し合ったりして情報交換をして、そういうことによって、仕事にプラスになるし、自分自身も成長するはずだから。そうしないと、本当の村づくりにはならないよ。「8時半にガチャン、5時半にガチャンとタイムカードの時間帯でのみでは、村づくりなんてできないよ」と、私は思ってる。

—(過去の新聞記事を拝見しながら)これは、駅伝大会の記事ですね。

長正；波及効果っていったらいいの。新聞の一面だけども。第1回目、小さな村が健闘したっていうのを、民報(福島民報)でこういうふう大きく取り上げてくれてる。優勝したのも大事だけれども、ちっちゃな村だけれども、総合で15位。町村では8位。第一回は、平成元年にやったんだけど、次の年から村の部っていうのもできた。村の部ではもう10連覇。だから、これも私は、村民のみんなが頑張ってるというのが若い世代にもつながれば、こういう結果になるのかな。誰もスター選手はいないよ。みんな中学校だの高校生だの。ほんで、スター選手がいらないんだけど、みんな頑張ってたんだ。結果として、総合的にはいい。

あとは、さっき言っていたミートバンクもここには書いてある。1月3日、元旦号にはこういうふう、特集で飯舘村が出た。当時の山田健一さんだ。ミートバンク。あと「若妻の翼」ね。一見出しが「飛んでる奥さん」!

長正；こういうの見るし、全国のマスコミが載せるから、飯舘村に研修にも来るようになった。一すごいですね。

長正：こういうのが、震災前の村だ。こんな明るい話題は今の飯舘村には何もないわ（笑）。

あとこういうのもやったんだよ。都会っ子山学校、「いいたて山がっこう」というのをつくって、都会の子供たちを呼んで、いろんな農業体験をさせた。酪農の乳搾りだとか。

—農村合宿みたいな感じですかね。

長正；そうそう。馬に乗せたりとか。この中で私が感心したのは、東京から、小学生ですらねえんだ、幼稚園の年長者の子なんだけども、女の子が一人で来たんだよ。

—1人で来た？

長正：「東京駅から一人で乗せますから、福島駅で受け取ってください」って電話で言われてな。すごい親だな。やっぱり、かわいい子には旅させることなんだな。そういう意味では、本当にやりがいがあったというか。

大体、ちっちゃい子供だから、3日くらい親と会わないと、みんな下向いてんだ。ああいう経験も必要だなと思うね。初めて親元を離れてみると、親の大切さというのが分かるんだな。

—資料、ありがとうございました。今日伺ったお話の分も、これからまとめます。また確認の作業とかでご連絡差し上げるとは思うんですけども、引き続きよろしくお願いします。今日はありがとうございました。

長正：はい、ありがとうございました。

二日間のインタビューを通して、震災後の飯舘村で、コミュニティを再生させる活動に取り組んでいる長正さんの姿から、ふるさとへのとても大きな愛情を感じました。また、実際にインタビューに訪れることで、飯舘村の空気や風の流れを肌で感じ、長正さんの思う村の魅力をより一層理解できたように思います。私たちも、一人一人がやりたいことを見つけ、自分自信を誇ることができる人間になりたいと思いました。

こちらもぜひ見てみてください！

飯舘村：長正増夫さんインタビュー 聞き手：林薫平

[人の支え合いをもう一度、エゴマに懸ける！～営農再開と地域再生①～ - reAGRI \(リアグリ\) - 福島大学食農学類](#)